を研究テーマに選んだのだ。つづけた。

「これまで多くの学者がベルツを研究しています。しかし、ときには過大評価をする学者もいる。たとえば、日本の伝統武術の柔術について、明治維新後に国民スポーツに育て上げたのはベルツであると、そう論ずる学者もいます。この点に関しては、ドイツ国内の多数のインターネットサイトでも同じ評価ですね。しかし、別に批判するわけではないんですが、いかにベルツを尊敬していても不正確な部分は見直さなければなりません。

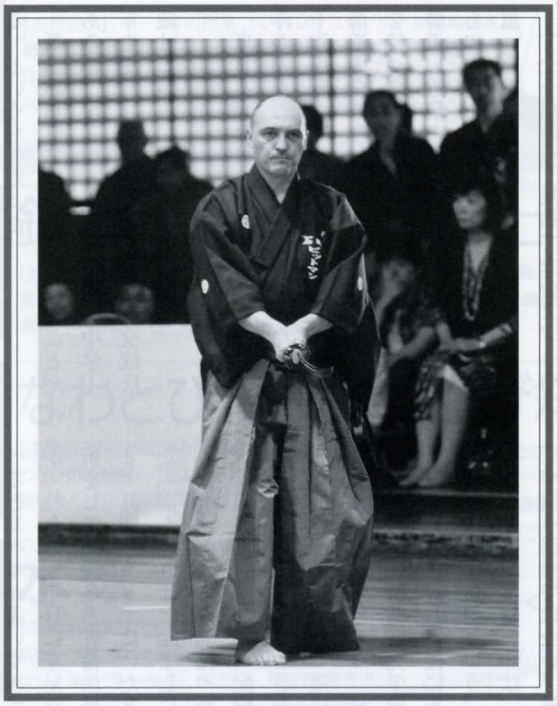
4年の歳月をかけて僕は、ベルツについて書かれた、多くの文献、論文、講演記録、当然『ベルツの日記』も熟読しましたね。参考資料を集めるだけでも大変でしたが、楽しかった。僕の著書は、日本だけに止まらず西洋にまで及ぶベルツの体育理論、彼の日本伝統武術に関する意見、分析、奨励について、これまでよりも幅広く紹介することができたと思います」

研究室の書架に納められた、ベルツ研究のために蒐集した多くの資料を、私に見せつつ説明した。

そのようなビットマンさんが、強く日本に興味を抱くようになったのは、16歳のときだったという。空手道を習い始めたのが大きな契機となった。

「空手道を始めると、どんどん日本にハマってしまった。空手道の歴史は？　武術とは？　日本という国は？　日本語は？　漢字は？　という調子でね。そこで大学では日本学とスポーツ科学を専攻することにしたんです。僕が入学したときに日本学を専攻した学生は、150人ほどだったんですが、徐々に減ってしまい、修士課程まで残ったのは、僕を入れて15人だけ。なぜなら日本語を身につけるのは大変だから。でも僕は、英語もフランス語も苦手だったけど、日本語だけは興味があったため、一生懸命やった。両親も驚いていましたね。

もう学生時代の僕は、日本語をしゃべりたくて、シュツットガルトの日本料理屋で働く日本人と仲良くなった。彼はドイツ語、僕は日本語をしゃべりたい。おたがいに教え、教わりました



ビットマンさんが初来日を果たしたのは、ドイツ・テュービンゲン大学在学中の90（平成2）年。10ヶ月間滞在し、金沢大学で学んだ。

「やはり、日本に来ないと本当のことは理解できないし、本場でやるのが一番。早く日本語を身につけることができるし、空手道も同じですね。奨学金もなく苦しかったけど、両親がバックアップしてくれた。感謝していますね。僕はひとり息子ですから。

収穫はいっぱいありましたね。剣道担当教授の研究室に行ったら、杖道の本があり、『これは何ですか？』と聞いたら、『やるか？』といわれ『やります』と。居合道も同じでしたね。教授が『演武会があるから行ってみたら』というので行ったら、『やるか？』『やります』とね」

そして、帰国し、テュービンゲン大学大学院修了後の93（平成5）年に再び来日。博士論文作成のために、ドイツ学術交流会DAADと、文部省（現・文部科学省）から奨学金を受けながら研究をつづけ、2年後に金沢大学博士課程に入学した。

「その後は、なりゆきですね。ここ金沢大学の非常勤講師として、ドイツ語や武道指導法演習の講義をし、そのうちに留学生センターから話があってね。たぶん博士号を持っていたため、今でいう准教授に採用されたんじゃないかな。運がよかったと思う」

武道の達人らしく終始、背筋を伸ばし、直視しつつ語るビットマンさんは、再びベルツについて語った。

「医師のベルツは、まず体を動かして健康な身体をつくることを推奨している。ベルツ自身も武芸に関心を持ち、弓術や剣術をしていた。僕も空手道、居合道、杖道などをやっている。武道の場合は、年齢を重ねるにつれて上達します。だから、生涯の心身の鍛練だと思う。ベルツもいっているんですが、このような日本古来の武道はもっと普及させなければいけませんね」

最近は十手や鎖鎌の稽古もしているという。